

2021年1月30日

2020年度聖路加国際大学大学院課題研究

がん緩和ケア領域における遠隔看護に関する文献レビュー

Literature review on tele-nursing in the field of cancer palliative care

18MN304

谷村 美希

## 要旨

### 【目的】

外来通院している進行がん患者の症状緩和を目的とした遠隔看護の方法と効果を明らかにする。

### 【方法】

英文献はCINAHL、PubMed、和文献は、医中誌 web を用いて 2010 年から 2020 年 9 月までの国内外の文献を検索した。「がん」「遠隔看護」「緩和ケア」「症状マネジメント」をキーワードとした。

### 【結果】

抽出された 11 件の論文を分析した。介入の媒体としては電話が最も多く 7 件、インターネットの使用が 4 件であった。ケア提供者は多職種であり、主としてナースが介入した文献が 6 件であった。対象者のがんの種類は、非小細胞肺癌患者のみが 3 件、卵巣がん患者のみが 1 件、他 7 件は様々な進行がん患者を対象としていた。患者のみを対象としたものが 8 件、患者と家族介護者を対象としたものが 3 件だった。遠隔看護の介入で緩和をめざした症状としては、多様な症状を包括的に捉え、複数の症状の緩和を目的とした研究が最も多かった。効果があったと報告されていた電話介入は「痛みと治療への心理的な障壁を明らかにする」「認知行動療法ベースの対処スキル指導」「症状管理方法の指導と、継続を見守る」「セルフモニタリング指導」「専門医と話し合い、治療調整」が抽出され、セルフマネジメントを高めるよう複数回の電話介入が行われていた。インターネットを用いた介入では、オンラインシステム上での「コーチング」「同病者・専門家との SNS を提供」「家族・友人の支援を得るためのツールや情報の提供」「症状や懸念の表現を促す」などが抽出された。

### 【結論】

外来通院中のがん患者は、医療機関から離れた自宅がマネジメントの場となるため、患者自身が主体的にマネジメントに取り組んでいくことが求められる。自己効力感を高め、動機付ける介入が、患者のセルフケア能力を高める。遠隔看護においては、複数回のフォローにより関係性の構築に努め、患者の体験を理解しようと関心を寄せ、患者－看護師関係を土台にしてケアを行うことが重要である。